



みえを歩こう

西行が愛したまち 二見浦

# 伊勢市二見町



昨年10月に上演された、西行演劇「命なりけり～西行、覚悟の旅立ちⅢ」キャストの皆さん※

古くから名勝地として知られ、伊勢神宮とも関わり深い二見浦には、多くの文人墨客が訪れ、さまざまな和歌や俳句などが生み出されました。その中で忘れてならないのが、西行(1118～1190)です。平安時代末期の歌人として知られる西行は、晩年の約6年間に二見の山寺で過ごしたのです。その具体的な場所は長い間不明でしたが、近年の発掘調査により、徐々に明らかになりつつあります。

平成25年、地域の有志たちが「二見浦西行実行委員会」(奥野雅則委員長)を結成。昨年秋季には生誕900年イベント「そこに西行がいた!! 西行が愛したまち二見浦」が盛大に行われました。今回は、西行の足跡を求めて、風光明媚な二見浦周辺を巡ります。

取材・文：中村真由美

## 「二見浦」の正式名称は？

「二見浦の読み方をご存知ですか?」 今回の散策の起点、JR「二見浦」駅で問いかけられ、一瞬戸惑います。正解は「ふたみのうらだ」と聞いて驚きました。古くから和歌などで詠まれていたのを根拠として、JR参宮線が鳥羽まで延長された際に、正式決定したのです。駅舎名のローマ字も確かに、「FUTAMA INOURA」となっていました。

意外な事実を知った駅舎を後にして南へ向かいます。すると、住宅街のほがれで案内板に気付きました。伊勢三郎伝承が記されています。伊勢三郎(1186)とは、源義経(1159～1189)に仕え、源平の合戦で軍功を挙げたとされる武将のこと。近くの江地区で生まれたともいわれ、「硯岩」と呼ばれる大きな岩のくぼみに湧く水で、手習いをしたと伝わります。

「現在『硯岩』を見に行くのは大変ですが、三郎が力試しに投げたという『力



「力石」



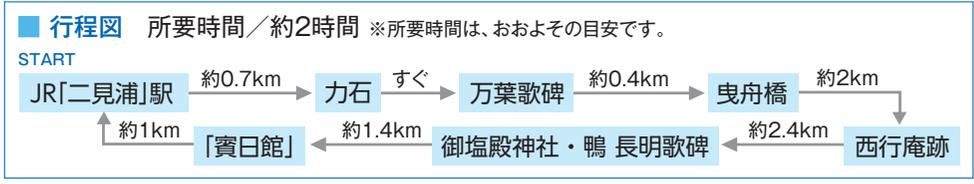
曳舟橋手前周辺の田園風景



万葉歌碑



今回の案内人は二見浦西行実行委員会事務局長の角谷泰弘さん。「名勝二見浦保存管理計画運営委員会」や「伊勢市二見町茶屋地区景観委員会」の委員も務めます。



石が近くにありますが」との案内で先に進むと、草むらの中にある大きな石が目にとまりました。地域では男の子が生まれると、「三郎のように学問に励んで、こんな石を投げられる偉い人になるんだよ」と諭したといわれています。

## 伊勢の浜荻

「力石」を過ぎ、五十鈴川派川に架かる曳舟橋の手前辺りまで来ると、目の前に田園風景が広がります。

鎌倉時代までは、この辺り一帯を雄大な五十鈴川が流れていました。船が行き交い、三津湊と呼ばれていました。

西行さんもこの湊を利用しています」とと角谷さん。お話によると、現在の五十鈴川派川の方が本流で、その川幅は300メートルもあったといわれています。しかし、明応7(1498)年の大地震で、周囲一帯の地形が様変わりしたのです。また、周辺には葉が片側にのみ付いている片葉の葦が群生し、伊勢の浜荻の名で知られていました。奈良時代に成立した『万葉集』には「神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝休らむ荒き浜辺に」の歌が収められ、近くには、その歌を刻んだ万葉歌碑がたたずんでいます。

## 西行の庵跡へ

万葉歌碑に別れを告げて、発掘調査の結果、西行が庵を結んでいたと推定される場所をめざします。

鳥羽院の「北面の武士」(院の御所の北面にあつて、院中を警護した武士)だった西行(佐藤 義清)は、23歳の時に突然出家した後、東北各地への旅を経て、高野山で日々を過ごしていました。その西行が二見浦に住むことになったのには、都での騒乱などが理由に挙げられます。いずれにしても、西行を師と仰ぐ、伊勢神宮神官たちとの交流や、二見浦の美しい景観に心慰められたことでしょう。

西行と二見浦との関わりを示す案内板は、宅地造成が進む光の街の一角に立っていました。そこには、平成4年から翌年にかけて行われた発掘調査で、墨書された木製品などが多数出土した遺構の年代が、12世紀第3四半期から13世紀前葉までのものであることから、西

に則つて続けられているのです。また、歌碑は鳥居の向かい側にありました。「二見がた神さびたてる御塩殿幾千代みちぬ 松蔭にして」の歌には、同神社の神々しさに感動した気持ちが表現されています。

### 「寶日館」

「発掘調査で出土した木製品などは『寶日館』で常設展示しています。ぜひ見てください」との案内で、海岸沿いを東へと歩きます。松並木が続く道には、



鴨 長明歌碑



西行歌碑

「浪(なみ)越すと 二見の松の 見えつるは 梢にかかる 霞なりけり」



「寶日館」



馬が描かれた木製品

西行歌碑や芭蕉句碑などが点在し、文学散歩も楽しめます。しばらくの間、心地よい潮風に吹かれながら歩くと、重厚な建物が現れました。ここが「寶日館」です。寶客をもてなすため、明治時代中期から昭和時代にかけて建てられた近代和風建築は、その価値の高さから、国の重要文化財に指定されています。館内では、都で武士が乗るような馬や、僧侶やカエルを描いた木製品などを間近に見ることができました。「作者は不明ですが、もしかすると西行さ

んが描いたかも知れませぬ」と語る角谷さんからは、西行と二見浦を愛する熱い想いが伝わります。「寶日館」で、歴史ロマンを掻き立てられた後は、終点「R」二見浦「駅」へ。徒歩で12分程度の距離ですが、「夫婦岩」や二見興玉神社などを巡り、旅館街をそぞろ歩きするのも楽しいものです。西行が愛したまちを心行くまで散策してみたいかがでしょう。

TEL 0596-431-2231  
問 二見浦西行実行委員会事務局



「西行と伊勢二見とのかわり」を記した案内板



御塩殿神社 本殿



御塩焼所(左側)と御塩汲入所(右側)

行の逗留期間、治承4(1180)年ごろから文治2(1186)年までと重なることなどが記されています。

「この辺りは、豆石山の南面に当たります。地元では、あんによ」と呼んでいて、鴨長明が記した安養山とも一致します」と角谷さん。説明によれば、西行自身は二見浦のどこに住んでいたかを示しておらず、鎌倉時代初期の歌人である『方丈記』の作者としても名高い鴨長明(1155-1216)が、旅日記に安養山に住んでいる旨を綴ったのが数少ない手がかりだったのです。それでも長年、かつての安養山(現在の豆石山)

### 御塩殿神社と 鴨長明歌碑

「次は御塩殿神社へ行きましょう。ここには鴨長明の歌碑もあります」と教わりながら、御塩殿神社に向かいます。同神社の歴史は古く、天照大神のご鎮座の地を求めて、倭姫命が二見を訪れた際、土地の神・佐見都日女が奉った堅塩を喜んだことに由来します。以来、伊勢神宮にお供えする御塩造りが古式